

## 生きた証



田 中 秀 治

「大学教官は幸せな職業だよ。定年が近づいてきて空しくなり、自伝を自費出版したり仏像を彫ったりしなくても、著書や論文で生きた証を残せるから」—これは、1988年、筆者が27歳で徳島大学薬学部助手に着任したとき、前任の森田秀芳先生（当時、医療技術短期大学部教授）から贈られた言葉である。後に、同先生ご担当の「化学実験」をお手伝いさせていただくことになり～法人化前は他部局での仕事に手当がついたので、低収入の筆者へのご配慮でもあった～毎回、さまざまなお話をお伺いできた。大学人としての生き抜き方、家庭人としてのあり方など、森田先生は、筆者の人生観に最も大きな影響を与えた方と言って間違いはない。

それから34年余の歳月が流れた。多くの学生との出会いと別れを繰り返し、筆者自身も3年半先に定年が見えてきた。教育と研究を圧迫し、睡眠時間まで削った事務仕事の中には、「あれは一体何だったのか」と思うものもある。しかし、今のところ空しさには陥っていない。学生たちの心に何かが残る、それが多少なりとも役に立ったのなら、それこそ私の生きた証だと思えるほど、筆者は出来た人間ではない。つたないものではあっても、自分の著書や論文が有形の「生きた証」として残ることを思い、「大学教員は幸せな職業だ」と、森田先生を思い出すのである。

これまで、本誌（2年間）や Anal. Sci.（6年間）などの編集委員を経験させていただいた。人様のお世話ばかりして自分の論文が書けない状況に、「こんなことをしている場合か」と思ったこともある。しかし、掲載決定通知を受けとったときの著者の喜ぶ姿を想像し、より良い論文に仕上げるためのお手伝いのできればと思っただけで務めてきた。本年、幸いにも Anal. Sci. に原著論文を公表できた。舶来品信仰みだったが、ページ下部に表示される跳ね馬マークと Springer のロゴを見て、一層嬉しくなった。2016年度から、FIA 研究懇談会の J. Flow Inject. Anal. の編集委員長を仰せつかっている。有料オンライン英文校正サービスの力も借りつつ、筆者の能力の及ぶ限り文章校正も丁寧に行っている。若手の著者には、今後の参考のために修正理由も付している。

原著論文の執筆は楽ではない。大学院生の頃は、僅か数行を書き進めずに苦しい日もあった。今は雑務で時間をぶつ切りにされる上、編集委員経験を積んだことで自分の論文の短所もよく見え、審査を受けるのが怖くなった。若手教員の中には、高い再任要件を満たすのに懸命で、明確な人生設計に至れない人もいるかもしれない。余裕の無さで視野が狭くなり、さらに、低関与の共著論文で報数を増やさざるを得ないなら、それは任期制の負の側面だと思う。主導的に研究し執筆した論文でないと、筆者がかかわった限りでは、より高い職位の人事では評価されない。学会発表で終わったのでは、この世に何も残さないのとはほぼ等しい。学生さんには、日頃から論文に載せる図表をイメージしながら研究するとよいと思う。原著論文を公表することで各人が「生きている証」を示し、そのことが自身だけでなく分析化学のステータス上昇につながることを願っている。

〔Hideji TANAKA, 徳島大学大学院薬学域, J. Flow Inject. Anal. 編集委員長,  
日本分析化学会中国四国支部元支部長〕